

■ 論 文

小学校への移行期の生活と保育・教育方法に関する一考察
——スウェーデンにおける教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動の調査から——

山本 理絵*

A Study on the Education Methods in the Transition from Preschool to Elementary School:
Learning from the Observation of the Documentation and Project Activities
in Swedish Preschool

Rie YAMAMOTO

キーワード：幼小接続，教育方法，ドキュメンテーション，プロジェクト活動，スウェーデン

transition to elementary school, education methods, documentation, project activities, Sweden

I. 研究の背景と目的

日本では、幼児期から小学校への移行の時期、とくに小学校入学1年前後のカリキュラムや教育・保育の方法については、関心が高まり議論となっている。2007年学校教育法改正において、幼稚園教育の目的として、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」ことが明記されるとともに、2009年度から全面実施された新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針や2011年度から全面実施された小学校学習指導要領において、幼小接続に関して相互に交流や連携を図るように留意する旨が規定された。

また、2009（平成21）年には、文部科学省と厚生労働省が共同し、「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」を作成した。さらに、2010年11月の「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」では、両教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることを重視し、幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉えることが提唱された。

このような状況の中で、各地で小学校への接続を意識した保育課程としての就学前アプローチカリキュラム、児童が義務教育の始まりにスムーズに適応していけるようなスタートカリキュラム、年長児後半から1年生の1学期までのジョイント期・接続期カリキュラムが作成されつつある¹⁾。また現在では、幼稚園教育要領改訂に向けて、中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や、幼児教育と小学校教育との接続の強化、アクティブラーニングの視点に立った指導方法などについて議論されている。

このような移行期・接続期のカリキュラムを考える際に、小学校生活の先取りや準備による適応を促すことを重視するのか、それとも幼児期の独自性を強調するのか、どのような子ども観や教育観に基づくのが問われている。

筆者は以前、就学準備のための機能的スキルを重視するアプローチではなく、子どもの幅広い発達ニーズと家族の支援という社会教育の伝統をもつホリスティックアプローチであるフィンランドの幼児教育・保育（就学前教育）を紹介した。フィンランドでは2000年9月から、全ての6歳児に対する1年間の無償の就学前教育（エシ

* 愛知県立大学教育福祉学部

コウル：年間700時間 1日4時間程度）が教育省の管轄となり正式に開始され、就学前教育のコアカリキュラムも作られた。就学1年前の教育は、興味・関心、好奇心、疑問に基づいた協同的目的意識的な問題解決の過程として、概念形成や因果関係の認識などの思考の発達の視点をもって展開されることの重要性を指摘した²⁾。

スウェーデンでも、幼児教育と小学校教育との接続を意識的・制度的に探究している。スウェーデンでは1996年に社会省の管轄だった保育園が就学前学校(Förskola)となり、1998年に学童保育とともに管轄が教育省に移った。その際に、就学前学校カリキュラム(Läroplan för Förskolan)ができ、その後、2010年の学校法の改正に伴ってカリキュラムも改訂された。フィンランドと同じく、小学校(基礎学校)にはその年(1月1日以降)に7歳になる子どもが秋から入学するので、日本より半年～1年就学が遅くなるが、その1年前は「就学前クラス」、通称「ゼロ年生」と呼ばれ、5歳児までの就学前学校とは離れて基礎学校と同じ施設等で年間525時間の無償教育が行われることになった³⁾。

改正学校法には、初めて、国連子どもの権利条約の基本理念が盛り込まれ、さらに就学前学校が他の学校形態から独立した地位を合法的に与えられたと言われる⁴⁾。

新しい学校法による、2010年のナショナルカリキュラムの改訂では、就学前学校の基本的な任務と大部分の目標に変化はないが、「成長と学び」の目標として、子どもの言葉と会話能力の発達、数学的能力の発達、自然科学と技術に関する目標が広げられ明確にされ追加された。その目標は、職員が仕事を確実に行うことができるよう方向性を示していて、子どもたちが達成すべき目標ではないという。

また、「フォローアップ、評価、発展」の章が新設され、子どもの成長と学びについてドキュメンテーションが作成され、フォローアップ、分析・評価が行われることとなった。スウェーデンでは、レッジョ・エミリアのアプローチを取り入れ、従来行われていた「テーマ活動」を発展させている⁵⁾。その過程で、ドキュメンテーションも作成するようになってきたが、基礎学校と同様に新学校法で教育活動の「質」に関して、計画・文書化・説明が求められるようになったのである。

さらに、2011年には「基礎学校、就学前クラス、学

童保育のためのカリキュラム」(全284頁)が作成され、就学前クラス(ゼロ年生)を含んだ学校の全体的な目標とガイドラインと基礎学校のカリキュラムが定められた。そして2016年夏に就学前クラスと学童保育の独自のカリキュラムが4頁ずつ追加され改訂された⁶⁾。このような改訂により、スウェーデン国外の就学前保育教育研究者の間では、就学前学校が学校システムのアプローチによって変容を迫られるような「学校化」を懸念する声もある。しかし実際は単純な「学校化」とはいえないことが報告されている⁷⁾。ただし、スウェーデンの保育・教育は、コミュニティごとに責任をもっており、地域によって違いがある。スウェーデンにおける入学前の時期は、どのように教育・保育が進んでいるのであろうか。スウェーデンのドキュメンテーションとテーマ活動を中心とした保育・教育の現状についてはその実践が紹介されるようになってきたが、基礎学校入学1年前の「ゼロ年生」クラスについては、まだ実態はあまり知られていない。

本論文では、「ゼロ年生」という独特の小学校への接続期が設けられているスウェーデンの就学前教育を現地で実際に観察し、教師たちに聞き取り調査を行った結果を考察し、日本における幼児期から小学校への移行期・接続期の教育・保育のあり方に示唆を得ようとするものである。

II. 研究方法

スウェーデン・ストックホルム市郊外の就学前学校の年長児のクラス及び就学前1年の「ゼロ年生」クラスの教育・保育の実際を観察するとともに、担任教師から聞き取り調査を行った。

〈観察の対象〉 スtockホルム県のSollentuna Kommun(ソーレンツーナ コミューン)にあるSofielundsskolans Förskola(ソフィエルンド基礎学校附属就学前学校)及びFörskolenslasse(就学前クラス)

〈調査時期〉 2016年4月29日(金)、5月2日(月)、5月3日(火)

〈主なインタビュー対象〉 4,5歳児クラス(Merkurius: 彗星グループ)の担任(就学前学校教師):ウェンドラー

由紀子 (Wendler Yukiko)⁸⁾。

〈倫理的配慮〉

就学前学校の観察にあたっては、研究の目的、観察のねらい・内容、プライバシーの保護等について英文で記した研究協力の依頼書を、就学前学校長あてに送り、就学前学校の職員及び保護者の同意を得た。中心的に観察する彗星グループ(クラス)の保護者には、担任教師(ウェンドラー)を介してスウェーデン語に訳した依頼書を渡し、同意書をいただいた。

Ⅲ. 調査結果と考察

1. ソフィエルンド就学前学校の概要

ソフィエルンド基礎学校附属就学前学校は、ストックホルム中央駅から北に電車で20分ほどのソーレンツーナの駅から歩いてすぐのところに位置する。110人定員の公立の就学前学校であるが、8月末から新学期が始まり、年度半ばの4月ごろには130人ほどが在籍している。学校は朝6時半から17時15分まで開いている。6月20日から8月20日まで基礎(小中)学校は休みになり、7月4週間は就学前学校も閉まる。

施設の建物は3階建てで、親子の出入り口がある2階部分が3歳未満児、3階部分が3歳以上児のフロア、1階部分(裏側に職員出入り口がある)は職員室・休憩室になっている。棟の前の広場は、乳児用の遊び場と幼児用の遊び場にわかれており、幼児用には、タイヤブランコ、砂場、ロープのジャングルジム(下には木製チップが敷き詰められている)、ごっこ遊びができるような小屋、遊び道具を入れてある倉庫などが置かれている。隣の敷地に基礎(小中)学校の校舎とグラウンドがある。

クラス編成は、1～3歳のにじグループ、3～5歳のギャラクシーグループに分かれており、ギャラクシーグループはさらに、土星、彗星、木星、金星グループ(クラス)に分かれている。待機児童が100人ほどおり、それを解消するために、アネックスという、ゼロ年生に移行する前のクラス(以前はここで移民の子どもに小・中学校に入る前に言葉を教えていた)が3～4月ごろから開設され、25から26人がそこで2、3か月過ごす(この学校特

有の制度)。その後、6歳の子どもたちは、小学校の中にあるゼロ年生と呼ばれる就学前クラスに入る。

幼児(3～5歳児グループ)は1グループ(クラス)15人前後で、保育者は2人ずつ(子ども7名につき保育者1名)いるが、障害児などがいると加配される。グループの子どものメンバーは、アネックスやゼロ年生に進級した後に、下のクラスから上がってくる子ども以外は年度が替わっても基本的には変わらない。保育者は、早番、遅番(最終が5時半まで)があり、昼食は子どもたちと一緒にとり、午後から交替で30分ずつ休憩がある。

2. 就学前学校の4、5歳児グループの教育・保育の実際

(1) 彗星グループの概要

メンバー：3歳以上のグループで、アネックスを除いて一番月齢が高い子どもたちのグループが、彗星グループ(クラス)である。子ども14人(観察時の年齢で3歳2人、4歳6人、5歳6人、うち1人障害児)保育者3名(就学前学校教師(förskollärare)1、準保育士(barnskötare)2、うち1人は障害児加配)。前年9月の年度初めには3歳になったばかりの子どもから4歳7か月までの子どもだった。日本でいうと、2015年9月では3歳児クラスと4歳児クラスにあたる子どもたちで、訪問した2016年5月現在では、3歳児クラスから5歳児クラスの早生まれにあたる子どもたちが在籍していることになる。

観察時には、同じクラスで中学校2年生の女子が職場体験を行っていた(5日間)。

保育内容：曜日によって、主に科学的な実験を子どもたちと一緒にやる日、遠足で森などに行く日、テーマ活動を中心に行う日、歌の日がある。このグループは午睡がない。

室内環境：グループの部屋の角にはサムリング(あつまり)をする円いじゅうたんが敷かれており、そのあたりの壁には、子どもたちの顔写真と名前、月曜日から日曜日までの文字が書かれた色カード、食事、トイレ、遊びなどの絵カード(文字付き)が貼られている。時計の下には、9時・11時・14時を指している時計の紙が三つ(サムリング、食事、おやつ)の時間貼られている(写真1,2)。

反対側の壁側は流し台と棚になっていて、0から10の基数とその読みの文字と絵が貼ってある(写真3)。ス

ウェーデンでは、数字と序数の読み方がかなり違うので、難しいという。

廊下を挟んで両側に、他3グループの部屋と、積み木・カプラ・ブロックの部屋、アトリエの部屋、食堂などがあり、廊下の突きあたりはままごとスペースとなっている。1部屋は決して広くないので、幼児グループを担当している保育者間では、どの時間にどのグループがどの部屋を使って遊ぶか、計画が立てられている。



写真1

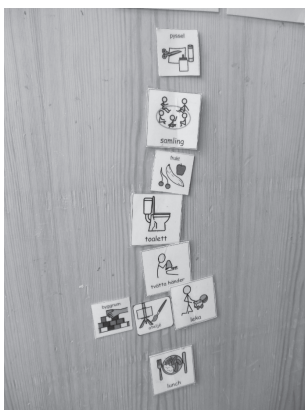


写真2



写真3

(2) 1日の活動の流れ

4月29日(金)朝8時半から彗星グループを観察したので、1日の流れを以下に記す。

8:00 ごろ～登校

保護者と子どもは部屋の前まで上がってきて出席確認と健康チェックを受ける。この日は2人欠席で12人。

9:00 サムリング(あつまり)

- ・片付けの手拍子(パンパンパン)の合図で子どもたちが集まってきて、始まりの歌をうたって、保育者が一人ひとりの名前を呼ぶ。
- ・彗星グループの人数と同じ1から14の数を子どもと一緒に唱える。
- ・曜日とその曜日の色を、壁に貼ってある絵カードを見ながら発音する(曜日の色はスウェーデンの手話で決められている)。手話を使っている障害児がいるので、クラスでも曜日の手話をみんなですべて覚えている。
- ・エンドウの苗の高さを測る

生物(Naturvetenskap)の一環としてのテーマ活動として、牛乳パックで育てているエンドウ豆のつるを子どもと教師がものさしで測り、同じ長さに緑色のテープを切って画用紙に貼り、そこに測った子どもが自分の名前を書く(写真4)。やりたい子が手を挙げ、3人いたので、子ども同士で誰がよいか言って、その子になる。

・ことばのテーマ活動

自分の好きな言葉(文字)を持ってきた男児に、いちごのつづり(裏にいちごの写真が貼ってある)を見て同じように1文字ずつ文字カードを床に並べてもらう。他にやりたい人を募って、女兒が同じようにする(写真5)。

・「キラキラ星」をみんなで日本語で歌ってくれる。

・担任教師(ウェンドラー)が子どもたちに、土産の日本の玩具の名称とあそび方を紹介してくれる。

9:30 フルーツタイム

・保育者がりんごをその場で切ってトレイに載せる。配りたい子どもが、トレイに載せたりんごを、みんなに配ってまわる。配る子どもの順番は保育者がリストを持っていて、毎日同じ子にならないようにしている。食べ終わった子からドアの前に並んでトイレに行く。

10:00 自由遊び

絵を描いたり、ままごとをしたりして遊ぶ。4、5人の子どもたちがお土産にもらったコマのつもりになって



写真4



写真5

くるくる回って楽しんでいましたが、ぶつかって泣く子もいた。障害児は別室で個別指導を受ける。

10:45 サムリング(手遊び歌)

- ・歌を歌いながら、保育者が袋から出したミニチュアの動物の鳴き声をする(羊、ブタ、馬、犬、牛)。
- ・コーラの歌、telephoneの歌などの手遊び。

11:00 昼食

保育者が呼んだ子ども(髪の毛を結っている人、○色の服の人など)から列に並んで食堂に行く。食事は、バイキング方式で、各自が皿を持って、サラダ、主食をとって、2テーブルに分かれて座る。

11:50 戸外遊び

戸外遊びのため、出口に行き、そこに掛けているつなぎのズボンとジャンパーを着る。サッカー、ジャングルジム、ブランコ、追いかけて鬼ごっこしたり、砂場で遊んだり、フラフープを投げたり輪の中に入って電車ごっこ

のようにして遊んだりしている。アイスホッケーのような道具や缶ぽっくりもある。

13:50 部屋に入って、おやつ(パンにマーガリン、チーズ、牛乳)

14:30 各自食器を片付けて自由遊び

友達と長靴下のピッピのパズルをしたり、数字のパズルを一緒にしたり、ライトテーブルに紙を置いて絵を描いたりしている子どもたちがいる。15時ごろからお迎えが来始める。

15:45 片付け 残っている子は5人となる。

5月3日(火)は、午前中は他のクラスを観察したが、おやつの時間以降は、彗星グループを観察した。このグループでは、おやつの時間に、4歳の誕生日の女の子がいたのでお祝いをした。誕生日の子どもの座っているテーブルの上に国旗と誕生カードを置いて、みんなが立って誕生日おめでとうの歌をうたう。年度初めにグループ全員の誕生カードが壁面に貼ってあり、誕生日が来るとそれを取り外して子どもに渡している。大好物のアイスバーを教師に冷凍庫から出してもらって、誕生日の子どもがみんなに配る。アイスを食べた後、おやつのパン、コンフレック、ヨーグルトを食べていた。

[考察]

サムリングの時間になると、子どもたちがそれぞれの遊びをやめて集まって来ていて、参加してこない子どもはいなかった。担任教師によれば、サムリングは、子どもたちが集まりたい、楽しいと思える、魅力的な内容にすることを心がけているとのことで、皆積極的に参加していた。この日はテーマ活動については、すでに展開されているものの毎日のくり返しの内容で、とくに時間をたくさんとっているわけではなかった。金曜日は、育児休暇中の家庭の子どもが登校しない日(週15時間の保育)であるので、新しいテーマ活動はやらないようにしているようだ。

おやつを配ったり並んだり、やりたい子どもに何かやってもらうときなど、公平に順番になるように配慮している。しかし、順番を最初から決めて、そのとおりにやらなければいけないというような、堅苦しいやり方ではない。子どもたちが納得するように、子どもたちと対等な話し合いの上で決めており、それが民主主義の考え

方だと捉えられている。食事もの量も子どもの自己決定権が保障されている。

自由遊びでは、どの子どもも、自分のやりたい遊びを数人ずつで遊んでいた。昼食後も2時間ほど戸外で遊び続けることができることに驚いた。異年齢であるので、大人が遊びを先導しなくても、子どもたち同士で遊べている。子どもたちにトラブルがあったり関わり方がまずかったりしたときには、保育者が適切に子どもたちの声を聴いて対応していた。活動の切り替え場面でも、自然と切り替えられていたのは、自由遊びで十分満足できたことや、後述する時計をめぐる活動により子どもたちが自主的に時計を見て次の行動に移っていると思われる。

(3) プロジェクト（テーマ）活動及びアクティビティ

通常、大きなテーマ活動は年間を通して一つか二つであることが多い。年度の最初の時期は、子どもたちの興味にあった様々な活動をしなが、保育者は子どもたちの様子を観察している。このクラスでは、中心に行ったテーマ活動はことばのプロジェクトであり、いくつか小さい活動も行っている。イースターなどの行事に関連する活動なども行っているが、実験の日に行ったアクティビティやプロジェクト的活動は、以下のようなものである。
〈科学的認識を育てる活動〉

1月頃から毎週実験の日には、いろいろな科学遊びを導入している。科学の実験の本も参考にしながら、このクラスでは次のような実験を行った。

- ・小麦粉粘土を塩と水、油を計って混ぜるところから一緒に作る。子どもたちが見ている前で一緒に作ることで小麦粉粘土の中に何が入っているか知ることができる。
- ・ペットボトルにビーズなどと、水や油等、重さの違うものを入れて玩具を作った。子どもたちは振って、沈み方の違いなどに気づく。
- ・コップを皿に伏せて皿のまわりに水を入れる。コップの中でろうそくを燃やすと、数えるうちに周りの水が減っていく。なぜかとみんなで考える。
- ・風船を膨らませて、近くで火をつけると、風船は割れる。次に風船に水を入れて火をつけると風船が割れない。保育者も驚いた実験だったが、なぜかと考えた。

ポイントは、保育者が子どもたちに答えや結果、理由を教えず、自分たちで考えさせることだそう。

〈時計をめぐる活動〉

1月頃、担任教師は、子どもたちが時間に興味を持っていることに気づき、子どもたちには時間を自分たちで知る権利があると思った。また大人に「今何時だから～しなさい」と言われるのではなく、今何時位だからもう片付けようと、自主性や1日の活動の見通しを持たせたいと考えた。教師は長い針は速く歩く「子ども」にたとえ、短い針は、ゆっくり歩く「おばあさん」にたとえて、針の見方を教えた。その後、個々人に「自分の好きな時間」とその理由を尋ねた。廊下の壁には、一人ひとりの好きな時刻を示した紙の時計を貼っており、その理由が書かれている（写真6）。このようにして、子どもたちに時間に対する興味を深めていった。子どもたちは、壁に貼ってある三つの紙の時計と実際の時計を照らし合わせて毎日使っている。



写真6

〈氷の実験〉

2月初旬に雪が降ってベランダに積もったので、担任教師は、子どもたちに「雪を部屋の中に入れておいたらどうなるかな？」と問うと、みんな「水になる」と答えた。外の雪を透明のケースに入れて観察すると、数時間後に溶けて水になった。では、その水を「またベランダに置いておいたらどうなるかな？」と聞くと、半分以上の子どもは外が寒いから氷になると答えていたが、その日に雪が降っていたので何人かの子どもは「また雪になる」と言った。教師は答えを言わないでその水を一日ベランダに放置した。次の日そのケースを見ると水は凍りついていたが雪が降っていたため氷の上に雪があった。

雪になる、氷になると言った子どもどちらも正しいか
たねと言って、またそれを部屋の中に入れて観察した。
観察をしていたら手の中や部屋の中が暖かかったのでま
たすぐに水になった。そこで次の日、「snö雪-Vatten水
-Is氷」と書いた文字を教師がプリントアウトしてその
関係について話し、雪、水、氷を写真に撮ってこの三つ
の単語と照らし合わせた。雪、水、氷の写真とそれぞれ
の三つの単語カードは取り外しが出来るように粘着剤で
ドアに貼っておき子どもたちが自由に照らし合わせがで
きるようにしておいた(図1の右に写っている)。何人
かの子どもたちはその単語が貼ってあるドアのところに
行ったり、単語カードをドアからはずしてそれを書き写
したりしていた。それを教師に「書けたよ」と見せてく
れた子もいた。しばらくして子どもたちが遊ばなくな
った5月ごろにそれらは取り外した。

〈ことばのテーマ活動〉

R児(当時4歳後半)が自分の名前に興味をもち、壁
に貼ってある友達の名前の文字を見たり、文字を書き写
したりするのを見て、周りの子どもたちも興味を持ち始
めた。また、ハローキティが好きな子たちが担任教師に
描いてほしくて(それを写して自分でも描こうとする)
寄ってくるので、順番を決める名前リストを作ることを
提案した。さっそくR児が1, 2, 3と人数分の数字を並
べた表を作って持ってきて、そこに描いてほしい子が自
分の名前を書き込んだ。(書けない子は書いてもらって)
その表の自分の文字や頭文字を見て次は自分だと文字に
興味を持ち、やがて「○○ちゃんの中にはAがある。
Yukikoの中にはないね」などの会話が聞かれるようにな
った。また、アルファベットのパズルで自分の名前を
並べる子や、園庭の砂に自分の名前の頭文字を書く子
もなどがいた。氷の実験でも子どもたちが単語を書きた
い、覚えたいという事実を観察できた。

そこで、担任は子どもたちが文字を覚えたいのではな
いかと考え、ことばのテーマ活動を進めることにした。
最初、アルファベットの文字を数人の子どもたちが体で
作って写真を撮って、ドキュメンテーションとして掲示
してみたりしたが、それはあまり人気なかった。

そこで2月後半頃から、人気のあるくまのマスコット
のピノとノートの入った袋を順番に家に持って帰っても
らい、自分の好きな言葉をノートに書いてきてもらうこ

とにした。ノートには、その言葉がなぜ好きかなども保
護者に書いてもらうようお願いした(写真7)。教師は、
その言葉を文字で書いたカードを作り、その裏に写真を
貼る。サムリングで、ピノが持ってきた言葉のカードを
見ながらアルファベットの1文字ずつのカードを並べて
言葉をつくる活動を行った。

部屋のドアには、大きな袋をかついだくまのピノの絵
が大きく貼ってあり、「ここで私たちは言葉を集めていま
す」と書かれている。袋には、今まで子どもたちが持っ
てきた言葉(ケーキ、アイスなど)が貼られている(写真8)。
食堂のテーブルにも、アルファベットの文字が貼られ透
明のビニールカバーがかけられている。子どもたちは、

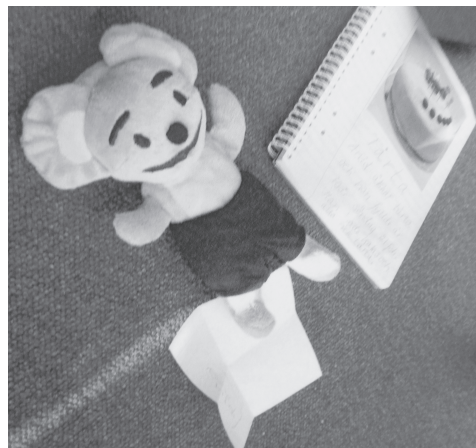


写真7

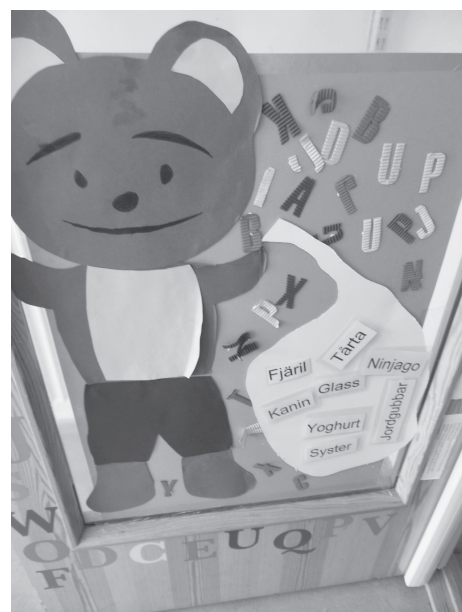


写真8

食事中その文字を見ながら、何かおしゃべりしていた。

ピノに家に遊びに来てもらう活動は、6月まで続けられ全員にノートが回った。年度末にお別れ会の席を決めてテーブルに置くネームプレートを作るようになった。最初は砂にNしか書けなかった子が、教師は何も教えないのに自分の名前を全部書くことができた。

〈エンドウ豆のテーマ活動〉

卵好きの保護者が、卵のパックをたくさん持ってきてくれた。それで何をしようかと担任教師がつぶやくと、準保育士がこれに種を植えているというので、「カイワレの種があるからやってみよう」と始まった。パックのくぼみに紙を湿らせ種をまくと芽を出したが、やがて水は蒸発し、乾燥し枯れてしまった。子どもたちはそこで「乾燥」「蒸発」「枯れる」という言葉と事実を知った。そこで4月に、次はエンドウ豆でやってみようと、水に湿らせたペーパータオルの上に種を置き、ビニール袋で包んで観察した。根や芽が伸びてきて、子どもたちが「入れ物が小さい、もっと大きく育つために土と太陽と水が必要だ」と言ったので、牛乳パックに土を入れ、エンドウ豆を植え替えて育てることになった。

室内に置いたエンドウ豆はぐんぐん伸び、「今日はこんなに大きくなった」「もっと大きくなった」という子どもの言葉から、教師は「こんなに」を視覚化できないか考えた。先述したように、エンドウ豆の茎を測り、棒グラフにすることで、前回よりどのくらい大きくなったか見ることができる。教師は、統計（数字はグラフで表せること）を教えたかったし、また、測った自分の名前をそこに書くという楽しみもあり、生物、物理、国語とたくさんの科目について広げられる取り組みであると捉えている。6月頃に14人が全員測り終えて1、2週間位して全部枯れてしまったが、枯れた後も測り続け、子どもたちがもう捨てるしかないと言ったので、みんなでコンポストに捨てて、残飯などから土を作ることも教えてプロジェクトを終わった。

〔考察〕

プロジェクト（テーマ）活動には、①保育者が立てた計画を実行するもの（vuxenstyrda）、②保育者が立てた計画から子ども達と一緒に作っていくもの（blandat）、③子どもの興味からプロジェクトを立てる

もの（barnstyrda）の3通りあると言われる⁹⁾。彗星グループには5歳児が少ないこともあり、どちらかという①②が見られた。しかし、プロジェクト活動を展開することを急ぐのではなく、子どもたちの興味・関心をじっくり観察し、疑問をもって考えることや、子どもたちの意見を大事にして進めている。保護者の協力も得て、興味を持っていることを聴き、保育者も知らなかったことを子どもと一緒に楽しんでいる様子がうかがわれた。その中で、子どもたちの知的好奇心を満たし、目に見えてわかりやすい方法で予測させたり、理由などを考えさせたり、体験を通して概念を獲得するように導いているといえる。

（4）教育ドキュメンテーション

子どもたちの取り組んだ氷の実験の写真や時計は、ドキュメンテーションとして壁に貼られていた。ことばのテーマ活動の写真は、活動の経緯がわかるように食堂の壁に子どもの目の高さに掲示されていて、それを見て子どもが話したことを書き込めるように吹き出しが付けられている（写真9）。吹き出しに何も書き込まれていないのは、子どもの会話がなかった写真である。保護者用には、グループの部屋の廊下の壁に、同様の写真に説明を付けて貼ってあった。写真をプリントアウトする時間がないときには、iPadで撮った写真をそのまま子どもたちに見てもらったり、プロジェクターにつないで大きく映したりしながら話し合うこともある。



写真9

就学前学校の中では、年度初めに3週間くらい、進級

する前のクラスの担任だった保育者が一緒にいて引き継ぎをするので、前年度壁に貼っていたようなドキュメンテーションの掲示物ももらって最初は貼っているようだ。

ドキュメンテーションを作成する際に、どのようなタイミングで写真を撮ったり子どもに声をかけたりするとよいのか、担任教師が準保育士にアドバイスする場面が観察中に見られたので、以下にその記録を記す。

〈5月3日 午後の自由遊び〉

2人の子どもが積み木の部屋でカプラ（積み木）を高く積んでいた。準保育士が「エッフェル塔に見えるね」と言ってiPadでエッフェル塔の写真を見せてあげた。すると、イメージがより湧いたようで、もっと高くしようとする。背が届かないほど高くなってきたので、準保育士が、子どもが乗る台を持ってくると、子どもがもう一つ台を持ってきて、2人の子どもが台に乗ってカプラを積む。周りの子どもたちは、台に乗っている子にカプラを渡してあげる。台の上に乗ってカプラが背の高さ以上になったところで、倒れてしまう。倒れたのもおもしろかったようだが、また4人で作り直す。そこにさらに2人の子どもが加わって一緒に作る。また、途中で壊れて、もう一回5人で作り直す。

ウェンドラーさんによれば、ドキュメンテーションは子どもを観察して、写真を撮るところから始まる。遊びが止まったときに、参考になるものを見せたりその先の活動が発展するように子どもに言葉をかけたりするように準保育士にアドバイスしていた。

〈ドキュメンテーションとポートフォリオについて〉

各人のポートフォリオファイル（バインダー）は、子どもの手の届く位置に並べられており、家族の写真やテーマ活動の内容などがファイルされている。現在では、ポートフォリオの機能は、コミュニオンが公立の就学前学校に費用を出しているソフトによってウェブ上で行われているので、これまで使われていたファイルが必要とされなくなっている。アプリを使って、保育中に撮った写真と説明や毎週のレポートを掲載し（クラス全体用と個人用の情報がある）、各保護者が日々の保育や子どもの様子を知り保育者とメールで対話することができるようになっている。教師は午後の自由遊びを見守りながら、iPadに入力していた。

今は、子どもの絵などアプリによって残せないもの、

メールで送れない作品など、子どもたちが入れたいという物をファイルに入れるようにしている。ポートフォリオの引き継ぎは、ソフィエルンド基礎学校では行われているかどうかよくわからない。

〈ドキュメンテーションに関する研修〉

就学前学校では週1回職員会議があり、いつもは、クラス編成や部屋の使い方、環境構成などの打ち合わせが多いそうだが、5月3日（火）17時から18時の職員会議では、新カリキュラムで義務づけられているドキュメンテーションをテーマにし、研修を行っていた。

参加者（就学前学校長と正規職員14人）は、ドキュメンテーションについて、ウェンドラーさんからのプレゼンテーションを受けて、各グループに分かれて自分が撮ってきた写真をiPadで見せ合いながら、なぜそれを撮ったのかなどを話し合っていた。

〔考察〕

ドキュメンテーションというのは、子どものビデオ、写真、絵や制作物、子どもの会話を聞いたり子どもが遊んでいる様子を見たりした記録等の全てをいう。そして、ドキュメンテーションをもとにして、保育者が子どもと、そして同僚同士で話し合うその瞬間に教育(学的)ドキュメンテーション (Pedagogisk dokumentation ペタゴギスク ドキュメンテーション) となる。教育ドキュメンテーションを取り入れる目的は、大きく三つあると言われる。保育者個人、または保育者チームが教育活動を見直し改善するため、子どもの意見を聴くため、そして保護者への情報提供や保護者からの意見を取り入れるためである¹⁰⁾。

彗星グループのドキュメンテーションとしての掲示物は、子ども用と保護者用と両方作られて、子どもたちの声を聴き取れるように工夫されていた。また、子どもたち自身が自分たちの活動を振り返り友達の思いや意見も知ることができ、保護者にはウェブも利用して結果だけでなく活動の意図やプロセスを伝えることができていた。保育者は保育中も常時iPadを使用しており、デジタル機器を利用する体制が整っている。

ウェンドラーさんによれば、スウェーデンでは、教育カリキュラムが改訂されてからまだ間もないために、教育ドキュメンテーションは全ての就学前学校に完璧に

取り入れられているわけではないという¹¹⁾。教育ドキュメンテーションをうまく活用してプロジェクト活動を発展させる実践は、まだまだこれからだといえる。

(5) 障害児の個別指導について

障害をもつ子どもについては、月1回、大学院を修了したスペシャルペダゴグが就学前学校を巡回して教師の相談にのってくれる。指を使ったスピーチの方法や、使用するとよい教材などを紹介したり準備したりしてくれる。単語を入力すると手話が表示されるアプリもある。このクラスにいる障害のある児童には1週間に3回個別指導をするように保護者と約束している。カードの絵を見せて、「誰が、何を買っているか」を質問したり、絵カードやミニチュアの動物の名前を質問して鳴き声を出したり、生活のルールを絵カードにして説明したり、積み木を教師と交替で積んで順番を理解できるようにしたりしている。そして、その状況について1週間に1回は親にレポートをウェブ上で提出している。

保護者とは年度初めの9月上旬に面談をしている。またゼロ年生に上がるときに父母と面談し、障害のことなどを学校に伝えたい場合、親が承諾書を出すとゼロ年生から就学前学校に教師が問い合わせにくる。

3. 就学前1年間の教育・保育

(1) ゼロ年生クラスの概要

隣の敷地にある基礎学校の建物の1階にゼロ年生クラスが3つ（赤・青・緑）ある。1クラスは、子ども20人で、教師が2名ずつ配置されている。障害や持病のある子どもがいれば、教師は加配される。午前9時から12時までが就学前クラスの活動時間で（無償）、その後は学童保育（6歳から12歳が利用でき有料）になる。朝は6時半から学童保育に行くことができ、帰る時間は子どもによって違うが、17時半まで学童保育を受けることができる。昼食は基礎学校の食堂で食べ、学童保育ではおやつが提供される。

ここは基礎学校の附属就学前学校があるので、ゼロ年生の担任の上司は就学前学校長（副校長）になるが、就学前学校の保育者との会議は年2回の学校全体の総会議以外はほとんどないそうだ。ゼロ年生の教師はその資格

をもった者しか担当できず、基礎学校1年生の先生と一緒に会議をして、子どもたち一人ひとりの読み書きや数の認識等について話をしている。基礎学校に入学すると、個々の子どもたちのレベルに合わせた教育を行っていく。

観察当日は、ここのゼロ年生クラスに入る予定の子どもが保育者と一緒に遊びに来ていた。（附属就学前学校からここのゼロ年生には、15人だけが行く。）

(2) ゼロ年生クラスの活動内容

5月2日（月）9時半から、ゼロ年生の1つのクラス（出席人数16人、担任2名+1名加配）を訪問した。朝9時ごろからサムリングをしていた。担任教師は、就学前クラスのカリキュラム・教育内容等について指導書を執筆しているような方であった。

子ども16人がサークルになってじゅうたんの上に座っている。アルファベットを一文字ずつテーマにしており、その日はGがテーマであった。ホワイトボードにはGg guldなどの文字が書かれている（写真10）。子どもたちのサークルの中に小さいテーブルが置かれ、その上にGのつくもの（金色のものなど）を数個おいてあり、そのうち一つを隠して、何を隠したか当てさせる遊びをしていた（写真11）。途中で観察者たちが持ってきたお土産の折り紙や紙風船を紹介してくれた。新しい道具や玩具を導入するときは、必ずサムリングで、まず教師がやって見せ、子どもたちとクラスの中での使い方のきまりをつくって、取り入れていくことを大事にしている。

また、1日の流れを示すアクティブカードが、子どもたちと確認しながらホワイトボードに貼られていた。8時半から下校までの間、座って行う静の活動と動的な活動

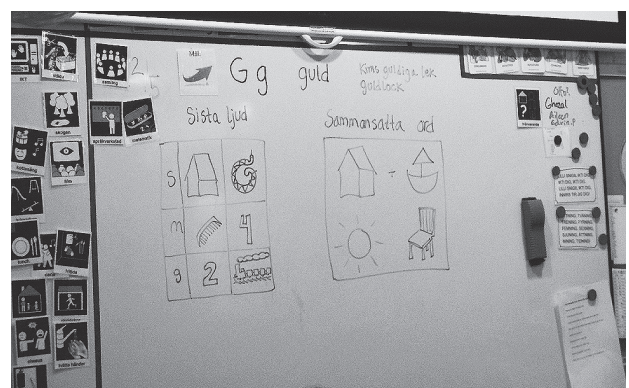


写真 10



写真 11

のバランスが考えられている。サムリングの後はワークブックに取り組み、終わった子どもから自由に遊んでいた。
〈文字〉

新しく文字を導入するときは、サムリングで取り上げてから、その後自由遊びの中で扱っていく。発音については、フォニックスを一つずつ学ぶ。アルファベットについては、文字を2次元、3次元（立体）で作ったり、コンピュータを使って書いたり、手で描いたり、体を使って表したりと、いろいろな感覚を使って多様な方法で表現して学んでいく。絵本のタイトルの頭文字が、学んだアルファベットの文字であるものを選んで置いてある。アルファベットの文字と絵のカードも貼っており、文字型に紙をくりぬくパンチも置いてあった。パンチはとくに文字が書けない子のために用意しているとのことだった。

既成のワークブックもあり、週1回ほど、サムリングの後に各自ワークをする時間がある。迷路や、絵や文字の色塗り、絵の中から同じものや仲間はずれのものを見つけるなど、文字への導入になるようなものである。スウェーデン語は、「金+魚=金魚」など、組み合わせさせてできている言葉があるので、そのような言葉を学ぶようになっている。ワークブックは、一人ではやらず、2グループのテーブルがあり、友達同士で教え合うようにしている。まず、自分でやってみて、わからなければ友達にきく→先生にきく、という順番で行っているようだ。
〈数〉

数については、積み木で何かを作ったりUNOで遊んだりしながら数を認識するようにした後、数字をカードで見る→手で数の形をつくる→数字を書く、などと徐々

に書くことを導入している。数え方としては、5のまとまり（日本の正の字にあたるもの）の書き方を学んだり、 10×10 のマス目に色をぬったり描いたり、色紙を貼ったり、文字を書いたりして、100の感覚を味わったりしている（写真12）。「100回跳んだらどこまで行けるか？」の問いに、「食堂まで」などと予測し実際にやってみた。「でも、違う跳び方で跳んだらもっと遠くまで行けたよ」と言う子どももいた。色紙で輪を作ってつなげたチェーンも、同じ色で5つずつつなげ、全部で100つなげて飾られている。また、紙を切り抜いて作った靴下に色を塗ったものが、2つ1組にして洗濯ばさみでつるしてあった（写真13）。足し算や図形に関するカードやパズルも



写真 12



写真 13

準備されていた。

自由遊びでは、iPadでゲームをしたり迷路のようなゲームのプログラミングの練習をしたりしている子どももいた。アプリケーションは、友達とコミュニケーションをとらないとできない、一人ではできないものを導入している。パズルのゲームや、○を押さえるとピアノの音になるソフトなどがあった。

〈RYMDEN宇宙〉

銀河系の惑星を並べた立体的な模型も、子どもたちがそれぞれ作っていた（写真14）。月のいろいろな形を変化する順に並べて貼ったものも掲示されていた（写真15）。惑星については、水・金・地・火・木……の歌があるので、その歌をうたったりした。月を取り上げたときには、同じ月でもいろいろな形があることに子どもが



写真 14



写真 15

気づき、教師が月について知っていることを聞き取り、次に月について何を知りたいかを聞いた。最後に何を習ったか(どんなことがわかったか)を聞いた。どのテーマでもこの三つのことを子どもたちに聞くようにしているようだ。このようにして、子どもたちの知識・興味や関心・発見したことなどを用紙やホワイトボードに記入する。テーマ活動の取組の写真や作品、話し合ったことの記録が文字化され掲示されていた。

〈時間〉

時間については、時間の歴史を話したときに、今は「時間」は携帯電話などですぐわかるが、昔はどのようにして時間を知ったのだろうか?という問いから、いろいろ実験をした。時間を計る方法については、花時計、水時計のことが話題に出て、その一つとして、ペットボトルに水や油を入れて、落ち方の違いを見た。子どもたちはペットボトルを使って、2分で落ちるように砂時計を作った。水を入れて1分のもも作ったが、時間を調整するのに苦労した。そして、子どもたちが実物の時計を見ながら自分たちで紙皿でも時計を作った。各自の作品は壁に掲示されていた（写真16）。



写真 16

〈いじめ防止〉

いじめ防止プログラム（OBPP：クレムソン大学のOlweusが提唱したプログラム）に取り組んだ。いじめについて映画やビデオを見た後、話し合い、クラスの友達と仲良くすること、優しくすることなど、クラスの約束事を決め、その約束を書いた紙の周りに約束を守るとい

う決意を表す、全員の手形を押して宣誓した（写真17）。

その隣に信号機のようなものが掲示してあったが、これは、いじめに対して自分をコントロールするツールであるという（写真18）。もし自分が友達を殴ってしまったとき、赤：ストップして自分を落ち着かせ、黄：問題を起こしてしまったのでどうしたらよいか解決の方法を探す。そして青：失敗するかもしれないが、ベストを尽くし行動を起こす。このように信号というツールを使って自分をコントロールする方法を教えた。このツールは、いじめた子も、いじめられた子にも同じように使う。

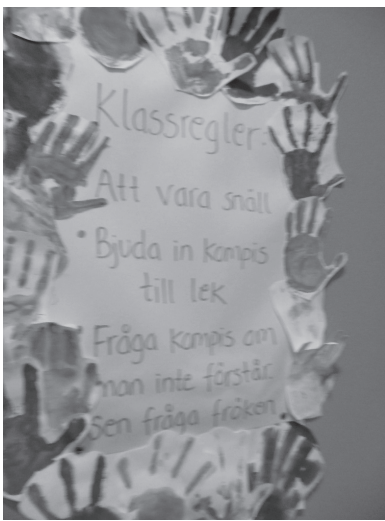


写真 17

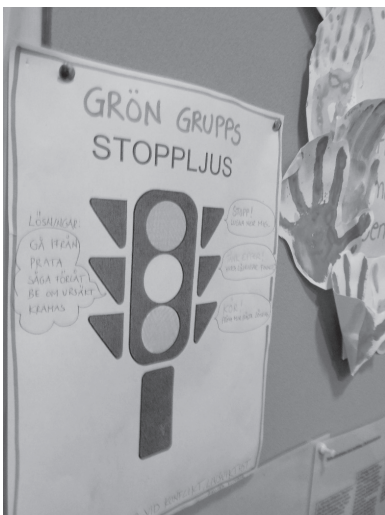


写真 18

〔考察〕

子どもたちは、あらゆる感覚、身体を通して、多様な

表現をしながら、数や言葉の基礎を学んでいる。日本のように、小学校でいきなり読み書きの学習に入るより効果的だと考えられる。また、子どもたちの既知に依拠して子どもたちの学びへの要求を引き出しながら、未知を探求しており、そのプロセスを子どもたち自身に振り返らせ獲得したことを確認していた。それは自信や自己肯定感につながると考えられる。

ゼロ年生では、どちらかという教師から提案される数や文字、科学などに関する、小学校への橋渡しを意識したテーマ活動が行われているようである。ちなみにフィンランドでは、就学前クラスは森のプロジェクトに取り組んでおり、森に行って写真を撮ってきて、絵に描いたり、森にあったものを拾ってきたりしていた¹²⁾。学校や教師によっても違うと思われるが、日本でいうと小学校1年生にもあたる時期であり、ゼロ年生の特徴にあった教育は模索中だとも考えられる。

ワークブックは、フィンランドの就学前保育・教育においても、似たようなものを使用していた。隣国のフィンランドと相互に影響を及ぼし合っているように感じる。観察したクラスでは、直接文字を書く練習はしていなかったが、学校によっては、子どもが黒板にアルファベットを綴るような実践もあるようだ¹³⁾。

5歳児の子どもがゼロ年生に入る際の教師の相互の連携や、基礎学校1年生のクラスとの連携はうまくとれていた。ナショナルカリキュラムにもそのような連携について述べられているが、就学前学校が学校体系に入ったことによるメリットが活かしているといえる。

IV. 総合考察

1. 民主主義的価値と安心感・自己肯定感の重視

スウェーデンにおける就学前の教育・保育においては、調査結果からもわかるように、保育者が2010年の就学前学校カリキュラム改訂以前より子どもの知的な側面の発達を意識的に援助しようとしている姿勢がうかがわれる。しかし、たんに知識を重視しているのではなく、民主主義的価値観の基礎が重視されている。ウェンドラーさんもたびたび、「民主主義」を教えると口にしていた。

スウェーデンの「就学前学校カリキュラム」には、冒頭の「1 就学前学校の価値観の基礎と任務」に「基本的な価値観」が掲げられ、「就学前学校は民主主義という価値観の基礎の上に立っている」と述べられている。改訂版でも、そこに続いて「学校教育法（2010・800）は、就学前学校の教育は、子どもたちの知識を獲得し価値観を発達させることを目的とすると規定している。就学前学校の重要な任務は、スウェーデン社会が依拠する民主主義的な人権尊重の価値観を定着させることである。」と付け加えられた¹⁴⁾。

就学前学校が子どもと活動を共にする中で積極的にとりあげなければならない価値観は、「人間の命の不可侵性、個人の自由と尊厳、誰もが平等であること、男女の平等、弱者や傷つきやすい者との連帯」などが挙げられている。

そして、移民を多く受け入れている国として文化の多様性を背景とし、相互理解と共感、思いやり、人間の意見や暮らし方の違い・多様性を受け止め尊重することなどが重視されている。彗星グループでは障害児が自然に集団に受けとめられ、その子が乗っているブランコを押してくれる子どももいた。

就学前学校カリキュラムや就学前クラスのカリキュラムでは、子どもが安心して生活でき、様々な活動に挑戦し自信をつけることができるように援助すべきことも強調されている。観察した中では、子どもたちが自分の「できなさ」を感じてしまうような場面は見られなかった。学べば学ぶほど自信がなくなるような教育・保育ではなく、自信や自己肯定感を育むことが重要であろう。

なお、スウェーデンでは、2006年に学校における差別禁止法が制定された。これによって、性別、性的指向性、宗教・信仰・民族、障害などを理由に不当な扱いを受けることを禁じ、さらに2008年に、いじめなどを含めた新差別禁止法に改正された。このことがナショナルカリキュラムの改訂にも盛り込まれている。そのような背景もあり、就学前学校やゼロ年生でも、障害をもつ子どもへの丁寧な保育・教育や、いじめ防止に関する教育が行われていた。

2. 知的好奇心に基づく身体全体を用いた探究的プロジェクト活動

次に、価値観と同時に重視されている知識の獲得について考察する。「知識」といったとき、スウェーデンでは、三つの側面から捉えられている。①ソフィア(Sofia)：知識（理論）、②テクネ(Techne)：技術、手作業のための知識、③フロネシス(Fronesis)：文字では表せない熟練された経験者だけが持っている知識（実践知）である。理論、技術、それらを社会でどのように使いこなしていくかという倫理知識を含めた三つの種類の知識を教育するのがスウェーデン教育であり、就学前学校での知識は③が一番大切だと考えられている。これら三つの知識は普遍的なものではなく、時代とともに人や環境とのかかわり合いの中で変化していくもので、大人が与えるものではなくて、子どもと一緒につくっていくものであるという捉え方がある¹⁵⁾。

そして、プロジェクト活動の考え方の基本でもある、子どもの興味・関心、好奇心に依拠して活動を進めることについても、カリキュラムの「就学前学校の任務」の箇所、次のように述べられている。「子どもの好奇心、物事に対する関心、自発性を促し、子どもの学びに対する望みや意欲を奨励すべきである。就学前学校の任務は、子どもの能力を伸ばし、文化遺産として今の世代から次の世代へと継承していくような価値や伝統、歴史、そして、言語や知識などの文化を、子ども自身が創造していくよう促すことである」。そして、あくまでも子どもの興味に依拠した遊びを通して知的な発達も促されると考えられている。「子どもは遊びや他者との協調、探究と創造を通して、さらには、観察したり、話し合ったり、反応することを通して知識を獲得していく。テーマ活動によって、子どもの学びに多面性と相互の関連性をもたせることができる。」

以上のような価値観と知識・学びの捉え方によって、観察したような実践が行われていると考えられる。もとも、1998年に作成されたスウェーデンの就学前学校カリキュラムには、「就学前学校の任務」として、一人ひとりの子どもの言語発達の重視、書き言葉の世界への好奇心や関心を促すこと、いろいろな表現方法、話し言葉や書き言葉を用いること、子どもが自然の循環過程に

関与していることが理解できるように寄与することなどが書き込まれていた。それに加えて、改訂によって、「2目標と指針」の「成長と学び」の項目で、就学前学校が一人一人の子どもの発達を援助する目標（就学前学校の仕事の方向性と期待される質）として、例えば次のような内容が挙げられている。

- ・話し言葉、語彙、概念を発達させ、言葉遊びをしたり、事物に関わったり、考えを表現したり、質問をしたり、他者と話し合ったり、コミュニケーションする能力を育てる
- ・書き言葉への関心やシンボルを理解する力を育て、それらのコミュニケーション上の機能を理解する
- ・空間、形、場所と方向性、量や位置、順序や数の概念、話し言葉の概念、そして計測、時間、変化についての基本的な資質を育てる
- ・自分や他者から提起された問題を、数学を使って、調べたり、話し合ったり、いろいろな解決策を試したりする能力を育てる
- ・いろいろな自然のサイクルや、人間と自然と社会がどのように影響し合っているのかについての関心と理解を育てる
- ・自然についての科学や関係性の理解を育て、また、植物や動物、簡単な科学的作用や物理的現象の知識を培う
- ・自然科学について、問題を提起して話し合ったり、識別、調査したり、言語化する能力を育てる
- ・日常生活の中の工業技術に気づき、簡単な工業技術がどのように機能するかを探求する能力を育てる

彗星グループで行われていた「ことば」のテーマ活動や「時間」「エンドウ豆」の活動は、これらの項目に対応すると考えられる。今回の調査では、どちらかという言葉や数、自然科学に関する活動が見られたが、他の就学前学校では「ミミズ」「自分との出会い」「跡」「ドラゴン」のテーマ活動なども取り組まれている¹⁶⁾。

ゼロ年生の独自カリキュラム部分は今回の訪問調査直後に公表されたようであるが、小学校への移行を促進する目的で、授業（Undervisning）が強調され、中心的内容として、「言語とコミュニケーション」（話し合い、読みきかせ、文字、シンボル、デジタルツール、メディア等）「創作と美的表現」「数学的推論と表現」（数、順序、

数学的概念、空間、形、場所と方向性、時間と変化等）、「自然科学・技術・社会」（観察、測定などを介しての問題の探究、ルール等）「遊び・身体的活動」などが挙げられている。しかし、基本的には、子どもたちの興味・関心・好奇心を大事にして、遊びを通して、子どもたちの想像力、洞察力、創造性、自信などを伸ばすことがねらわれており、実際にそのような実践が試みられていた。iPadで遊ぶことも、日常生活の中にある技術を排除しないで、使い方には配慮しながら積極的に取り入れていた。また、100マスを数字で埋める子ども、色紙で埋める子どもなどに見られたように、就学前教育から共通して、子どもの多様な経験や関心、ニーズ、意見、アイデアを大切にする姿勢が確認された。

現在、幼稚園教育要領の改訂に向けての議論の中では、幼児教育の内容として「学びの過程の重要性を踏まえ、具体的な活動の中で、比べる、関連付ける、総合するといった、思考の過程を示すなど、思考力の芽生えを育むようにする」¹⁷⁾ という方向性が提案されており、今後子どもの認識・思考の発達を意識した教育・保育が重視されていくであろう。しかし、その中でも、一律に目標に到達することを求めるのではなく、子どもたちの興味・関心や探求心などに基づいて、プロジェクト的活動を通して子どもたちの多様性を認める保育・教育が重要であろう。

さらに、日本の小学校1年生の前半期は、スウェーデンのゼロ年生のように、身体を使って、多様な表現方法、読み書きや計算の基礎を学んでいくことをもっと取り入れる必要があるだろう。日本においても、小学校の1年生ではとくに、生活科を中心として、他教科等との関連を積極的に図り、合科的な指導を行うなどの工夫をした実践が進められている。しかしさらに、国語、算数の授業そのものの中でも、観察したゼロ年生のクラスで行われていたように、「書く」前の段階や数や時間の概念の獲得を多様な方法でもっと体験させることも検討してもよいのではないだろうか。

フィンランドで就学1年前のクラスを視察したときも、スウェーデンと似たような実践が行われていた。朝のあつまりでの活動で、床に置いた横縞模様の靴下の中から、どれとどれが同じ柄か、なぜそう思うかを子どもに発言させていた。日用品に布をかぶせて隠して子ども

に触らせ、何か当てさせるゲームをし、アシスタントの先生が感覚（触覚・味覚・嗅覚・聴覚）ごとに分類してその文字を書いて見せたりもしていた¹⁸⁾。フィンランドの就学1年前の教育カリキュラムによれば、文字を見る環境を構成し、言葉遊び、お話、劇などで聴いたり話したりすることを楽しむことが重視されている。また、身体的運動、ゲーム、具体的な実験、観察や測定、聴き取りなどを通して、数えること、分類、比較、並べ替えなどによって対象を探求・分析すること、おとなや子ども同士でのかかわりあいの中で、推論・予測し因果関係を熟考し結論を導き出すような問題解決を通して概念を形成したりすることが大事にされている¹⁹⁾。このような実践も参考になるであろう。

3. 教育ドキュメンテーションによる省察と学び合い

子どもたちの好奇心や探究心、学びの意欲を大切にするためには、教育ドキュメンテーションが必要になってくる。教育ドキュメンテーションでは、子ども同士で話している言葉を記録することがとても大事だと考えられている。ソフィエルンド就学前学校の彗星グループのように、子どもの観察や子どものつぶやき・疑問に基づいて、子どもの興味から出発するようなドキュメンテーションとテーマ活動によって、より意欲的、意識的に活動を発展させていくことができ、また、知的な要求も満たされていくといえる。

カリキュラムには、文字や数、量、形、時間、計測などに関連した内容が挙げられているが、それらを教えるという保育者の意図が先行してしまうと、遊び・活動が子どもの興味からずれてしまい、やらされる活動になってしまう危険性がある。しかし、保育者はそのような子どもの発達を意識して、視野が広がったり疑問をもって探究するように、環境を整えたり声をかけたりする必要があり、保育者の関わり方のバランスが難しい。子どもの思いと保育者の考えとのズレを埋めてくれるのが教育ドキュメンテーションではないかと考えられる。保育者同士、保育者と子ども、子ども同士、保護者と子ども・保育者の間で、活動を振り返りながら、最も自分たちに合った方向性を見出していくことができるのではないだ

ろうか。教育ドキュメンテーションの過程で、保育者自身も子どもの捉え方や考え方を深め成長していくことができるといえる。

スウェーデンの中でも、多様な保育者がおり多様な実践がなされているので、今回観察した方法がスウェーデンのどこでも行われているわけでない。スウェーデン全体でも、まだまだ保育者間の保育知識のばらつきがあり、本来の意味でのドキュメンテーションやプロジェクト活動を行っていない就学前学校も存在するようであり、課題となっている。ソフィエルンド就学前学校でも、ドキュメンテーションについての理解を深めるための研修を行い努力していた。

日本でも、幼稚園教育要領改訂に向けて、幼児期にふさわしい評価のあり方として、「日々の記録や、実践を写真や動画などに残し可視化したいいわゆる『ドキュメンテーション』、ポートフォリオなどにより、幼児の評価の参考となる情報を日頃から蓄積するとともに、このような幼児の発達の状況を保護者と共有することを通じて、幼稚園等と家庭が一体となって幼児と関わる取り組みを進めていくことが大切である」²⁰⁾と述べられている。多忙を極める日本の保育現場でも、今後、各実践現場に合ったドキュメンテーションや記録の方法を模索していく必要があるだろう。

注

- 1) 2011年度から全面実施の小学校学習指導要領生活科の解説では、小学校に入学した児童の学校生活への適応を進めるために「スタートカリキュラム」を編成し、生活科を中心とした総合的な指導を積極的に行うことが示されている。接続期のカリキュラムには次のようなものがある。木村義彦監修・茅野市教育委員会編『育ちと学びをつなぐ『幼保小連携教育』の挑戦実践 接続期カリキュラム』ぎょうせい 2016年/お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター『「接続期」をつくる一幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働一』東洋館出版社 2008年
- 2) 山本理絵「フィンランドにおける幼児教育・保育カリキュラム(1) —ECECの理念と教育目標を中心に—」『愛知県立大学児童教育学科論集』第46号 2012年 43-50頁、山本理絵「保育の学校化を問う—小学校への移行に配慮した保育計画の視点から—」『保育問題研究』No. 255 2012年 35-48頁 参照。
- 3) 1991年から、6歳で基礎学校へ入学することを選択することもできるようになった。現在は3～5歳も年間525時間は無償。大野歩・七木田敦「スウェーデンの就学前クラスに関する研究—『学校化』問題と生涯学習アプローチの観点から—」『保育

- 学研究』第49巻第2号 2011年 22～23頁, 白石淑江・水野恵子『スウェーデン 保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』かもがわ出版 2013年 参照。
- 4) イングリッド・エンゲダール「ナショナルカリキュラムの改訂について」白石淑江・水野恵子『同上書』180～181頁。
- 5) テーマ活動とプロジェクト活動の違いは認められないと言われる。『同上書』56頁参照。
- 6) Skolverket (2016) Läroplan för grundskolan, förskoleklassen och fritidshemmet 2011 (Reviderad 2016). Stockholm: Skolverket.
- 7) 大野歩「スウェーデンにおける2011年学校改革に関する研究—就学前保育・教育領域への影響を中心に—」『北ヨーロッパ研究』第8巻 2011年 13～22頁, 大野歩・七木田敦「前掲論文」22～29頁参照。
- 8) ウェンドラー由紀子「スウェーデンの保育」愛知県立大学生生涯発達研究所『生涯発達研究』6号 2014年 37～52頁参照。
- 9) ウェンドラー由紀子「スウェーデンの保育—就学前学校における教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動—」愛知県立大学生生涯発達研究所『生涯発達研究』8号 2016年 66頁参照。
- 10) 「同上論文」61～62頁参照。
- 11) 「同上論文」61頁参照。大野歩「スウェーデンにおける保育評価の変容に関する研究—2011年教育改革後の教育的ドキュメンテーションに着目して—」『保育学研究』第52巻第2号 2014年 6～17頁 参照。
- 12) 山本理絵「異年齢保育を考える8 小学校への移行期の保育～北欧から学ぶ」東京都公立保育園研究会『広報』222号 2013年3月 58～65頁参照。
- 13) 大野歩・七木田敦「前掲論文」23～24頁。
- 14) 「改訂就学前学校カリキュラム」『スウェーデン 保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』所収 184頁。
- 15) ウェンドラー由紀子「スウェーデンの保育 —就学前学校における教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動—」62頁, 「改訂就学前学校カリキュラム」参照。
- 16) ウェンドラー由紀子「同上論文」63～74頁。
- 17) 中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会幼児教育部会「幼児教育部会の審議の取りまとめ」2016年8月
- 18) 山本理絵「異年齢保育を考える8 小学校への移行期の保育～北欧から学ぶ」58～65頁参照。
- 19) 山本理絵「保育の学校化を問う—小学校への移行に配慮した保育計画の視点から」参照。
- 20) 「幼児教育部会の審議の取りまとめ」

謝 辞

本調査研究にご協力いただきましたウェンドラー由紀子さんをはじめ、ソフィエルンド基礎学校附属就学前学校の皆様に感謝いたします。

付 記

本研究は科学研究費(2012～2016年度 基盤研究(c) 課題番号2453104 山本理絵研究代表)の助成による。調査記録の整理・確認については、訪問調査に同行した松川礼子(名古屋短期大学非常勤講師)に協力していただいた。